愛の空 恋の森

愛の空 恋の森

加堂秀三

集英社

愛の空 恋の森

一九七七年四月一〇日 初版印刷
一九七七年四月二五日 初版発行

定価 七八〇円

著者 加堂秀三

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社
東京都千代田区一ッ橋二―五―一〇
郵便番号 一〇一
電話 出版部 二三〇―六三六一
販売部 二三〇―六一七一

印刷所 大文堂印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします

©1977 S. KADŌ Printed in Japan

0093―772083―3041

目次

第一章　ワーク・ブーツ　5
第二章　海の匂い　27
第三章　黒人霊歌　59
第四章　鳥の影　119
第五章　稲妻　187
第六章　暗礁　215
第七章　風の声　269
第八章　大地の傷　299
第九章　旅立ち　345

装丁　山岡茂

装画　上橋薫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

愛の空　恋の森

第一章　ワーク・ブーツ

1

男たちの整髪料の匂い、タバコの煙、それにミルク・スタンドから流れてくる珈琲の匂い、そんなものの濃くたちこめる朝の空港待合室で、ワーク・ブーツをはいた若者を見かけたとき、伊沢靖子は体がふるえた。そして、

〈これから青森の牧場へ行っても、馬には乗らないようにしよう〉

と考えた。

昨夜、神戸に住む婚約者の麻生雅弘が、恵比寿の靖子の部屋へ電話をよこし、

「青森へ行くのはいい。ひとり旅も悪くない。しかし、旅の途中でほかの若者が好きになったりしたら、知らないぞ。馬から落ちるかタクシーがダンプカーと衝突するか、ともかくきっと良くないことが起るから」

と、冗談まじりにいったからである。

もっとも、その電話を受けたときの靖子は、

「なにいってるんです、それはこっちでいいたいことですよ。遊びすぎると、承知しないから……」

と軽くいい返した。

二年前から神戸の家を遠く離れて恵比寿の叔父の屋敷に住み、渋谷にある某カトリック系の女子大学へ通っている靖子は、生田にある大手の造船会社へ勤める雅弘が、毎夜神戸の町でどんな生活を送っている

か、常常たいそう気になっていた。
また昨夜までの靖子は、婚約者である雅弘を差し置いて、ほかの若者へ心を移す、そんな自分が考えられなかった。
だから彼女は強気だったのだが、いま、不思議な活気と何かしら荒荒しい気分とに満ちた、この早朝の空港ロビーに立った靖子は、自分の気持が大きく揺らぐのを、どうすることもできなかった。
待合室は暖房がきいていて、朝からひとを眠気に誘う、沈澱んだような温気を持っていた。しかし、時おりフィンガーのほうから吹きこむ朝風は、雪の匂いがした。まだ十一月の半ばをすぎたばかりで、雪の季節には少し間があるのに、今朝の空港の風には、たしかに雪の匂いが含まれていた。そしてその温気と冷たい朝風との出会うような場所に、ワーク・ブーツの若者が立っていた。
若者は背が高かった。背が高いのにノッポに見えない、或る充実した逞しさを持っていた。温かそうなダッフル・コートに包まれた肩の辺りが頼もしく、胸幅も広くていかにも若若しかった。そして焦げ茶色のダッフル・コートにはなかなかよく似合う、葡萄酒色のハイネックのセーター。そのセーターのすぐうえにある男くさい、しかし眼もとなどの甘い端整な顔。——靖子は、見ないふりをしてその若者を観察して、ひとり心を騒がせた。
やがて搭乗の時刻がやってきた。靖子は先を急ぐひとびとに尾いて、待合室からエプロンへ出た。
風がたいそう強かった。その風のなかに、三沢まで行く飛行機がとまっていた。
〈ほんとうにこの旅の間、わたしは馬に乗ることを控えよう……〉
定刻どおり飛行機が羽田空港を飛びたったとき、靖子はまた改めて、心のなかで呟いた。
それはさきほど待合室で靖子の眼を惹きつけた若者の席が、彼女の座席のすぐ隣りだったからで、靖子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は嬉しかったが、同時に、眼のやり場にも困らなければならなかった。
靖子が若者のほうをなるべく見ないようにして、窓外へばかり眼をむけていると、朝陽に光るちぎれ雲のはるか彼方に、富士が見えた。
富士が消えると間もなく、前方右手に、それも朝陽に銀色に光る、霞ヶ浦が見えてきた。そして霞ヶ浦の向うには、鹿島あたりと覚しい海岸線が、地図で見るとおりの張りきった、強い弓形の線を描いて続いていた。
〈……まァ、贅沢な眺めねえ!〉
靖子は心から感心した。
しばらくして、靖子がなにげなく機内へ眼を戻すと、スカートに包まれた彼女の膝のすぐ横に、若者の、圧倒されるほどに大きな太腿が並んでいた。
その太腿は単に逞しいだけでなくすこぶる長くて、若い力と均整の良さとを備えていた。靖子は内心ひそかに、
〈ここにも贅沢な眺めが一つある〉
と考えた。
婚約者がいるとはいってもまだ二十歳の靖子だった。異性の肌は知らなかったが、神戸で貿易商を営む父親が競走馬を持っている関係で、馬の姿には、少女時代から親しんできた。それで靖子はジイン・パンツに包まれた、はちきれそうなその若者の太腿を眺めているうちに、ふと素性のいいサラブレッドの立姿を眼にうかべた。そして自分で自分の連想を恥じ、ちょっと頬を赤らめた。
靖子がそんなふうに、娘とも思えないような大胆さで、若者の美しい肢などを盗み見ているうちに、飛行機はいつか福島をすぎ、仙台をすぎて、三沢上空へ着いた。

空はここでも晴れていて、小川原湖らしい海べりの湖が、陽にギラギラと光っていた。
靖子は飛行機がだんだん高度をさげていく、その耳鳴りを伴う降下感のなかで、ぼんやり今度の旅のなりゆきを考えた。
二、三日前から神戸の父が八戸の潮牧場へ、先年買いとった一歳馬の、育ち具合を見に行っていた。靖子はその父親に会うために、そしてまた、十四、五万坪はあるという潮牧場を見るために、今朝こうして羽田を発ってきたのだったが、この旅がはたして最初の思惑どおり、気軽な二、三泊の旅で終るかどうか、いまとなってはわからなかった。
〈出発のときから、こんなに心のときめくようなひとに会ったのだから、この旅はほんとにどうなるかわからない……〉
靖子は自分の乗った飛行機の影を眼の下に眺めながら、しきりにそんな思いをもてあそんだ。
〈ありきたりの旅なんかしたくない！〉
心のどこかに、そういう願いがあるのかも知れなかった。

〈……どんなことがあっても、ここでは馬に乗ってはいけない〉
飛行機が三沢空港へ着陸したとき、靖子は三たび、心のなかで呟いた。
飛行中、靖子は遂にひとことも、隣りの座席の若者と、口をきく機会がなかった。しかし彼女の心はこの一時間のあいだ、ずっと若者への、恋とも憧れともつかない気持で占められていた。
靖子は必ずしも雅弘の、冗談半分の予言を信じているワケではなかったが、それでも、こんな気持で馬に乗るのは、やはり危険だと考えた。
やがて安全ベルトを解いてもいいときがきて、ひとびとがそろそろと、それぞれの座席を立ちはじめた。

若者も立ち 靖子も立った。そして急勾配のタラップを降りていくと、空港は羽田よりもっと風が強かった。
靖子はその風のなかを、バーバリーのトレンチ・コートの襟をたて、バスまで歩いて行った。
歩いているうちに、いつか若者とは、離ればなれになった。
靖子は軽い失望を感じた。
しかし、十分ほどしてバスが町なかにある空港ターミナルへ着き、そこで父親の赤ら顔を見つけると、彼女の心はすぐ立ち直った。
〈行きずりのひとに憧れるなんて、どうかしてるわ〉
靖子は父親のまえへ立ったときには、そう自分で自分を冷かすほどの余裕を取り戻していた。
そんな靖子に父親が話しかけた——。
「晴れてよかったな。ちょっと風は強いけど」
「ええ、霞ヶ浦や鹿島灘がよく見えたわ」
「そうか。——じゃァ、出かけようか」
父親の靖之は待合所前の一角に、牧場のものらしい車を待たせていた。
「娘の靖子です。——このひとはね、七戸(しちのへ)の岡野牧場で働いている杉田さんだ」
父親が靖子を、車の脇の青年に引きあわせた。
杉田というその青年は牧夫なのだろう、背は中背だが体つきが見るからに頑丈で、眼の色が暗かった。
靖子は或る気味悪さを感じたが、じき気を取り直して、父親に尋ねた——。
「七戸?——お父さん、八戸にご用がおありになるんじゃないですか」
「そうさ、そうだがね、八戸の潮牧場、あそこでの用はもうすんだんだ。だからこれから、七戸へ行く」

「遠いんですか」
「まアな、三沢からだと、八戸へ行くのでも七戸へ行くのでも、結構距離があるんだよ」
話しているうち、車が三沢の町を出はずれた。
葉のあらかた落ちつくした林に淡い初冬の陽がさして、いかにも北国の風景らしかった。車の窓から射しこむ陽ざしも淡かった。
靖子がぼんやり窓外を眺めていると、陽だまりになっている農家の庭に、実だけになった柿の木が、一心に光を集めるようにして、立っていた。
「ここが十和田の町です。奥入瀬(おいらせ)川、それから十和田湖へ行くときは、さっきの道をまっすぐに行けばいいんです」
よほどたって運転席の青年が、重い口をひらいた。
声は低く太かったが、土地のひとではないのだろうか、言葉に訛(なま)りは感じられなかった。
「十和田湖か。紅葉の季節には、たいそうな人出だろうな」
父親が尋ねた。
「ええ、車で車で、どうにもなりません。焼山から上は、歩いたほうが早いくらいですよ」
やがて行手に牧場が見えてきた。
そこは牧場というより大公園とでもいえばいえるようなたたずまいで、丈の揃った欅(けやき)の巨木が、生垣代りにどこまでも続いて立っていた。
「まあ！　これが牧場？」
靖子は驚いた。
すると父親が声を弾ませて、

「そうなんだよ。私も昨日初めてここへきてびっくりしたんだが、なんと敷地が三十五万坪だってさ。ええ。とても隅ずみまで見て廻ることなんか出来ないよ」

その日の午後遅く、靖子は岡野牧場のひとに自転車を借り、牧場内の探険に出かけた。

陽ざしはもう赤味を帯びていて、風の冷たさ、冷気の厳しさは予想外だったが、靖子はすこしも怯まなかった。放牧地と放牧地との間に欅や一位の並木をつくり、採草地脇には馬頭観音や稲荷の社もつくってある、その広大な牧場は、靖子がどこまで自転車で走っても尽きなかった。

靖子はその広さに魅入られでもしたように、寒さを忘れてムキになって、ひたすらペダルを踏みつづけた。

二、三十分も自転車で走ったときのことであった。靖子は思いがけなく深い森かげへ出た。そしてそこで、見てはならないものを見た。

森のなかのちょっと空池のようになっている窪地で、さきほどの杉田という眼の暗い青年が、まだ年若い色白の女を、必死で地面へ組み伏せていたのである。

女も杉田の体を求めていた。

見る見る女の胸がひらかれ、スカートのファスナーが引きおろされた。二人は唇を合わせ、互いに互いの頸へ腕を巻きつけ、落葉の褥でもつれあった。

靖子はすぐ引き返そうとしたが、なぜか体が動かなかった。また下手に動いて、杉田に自分の存在を知られることも、彼女はなんとなく恐ろしかった。それで靖子が進みもならず、帰りもならずに、ただ自転車に跨ったままでいると、杉田が若い背中を大きく撓め、女の乳房へ口をつけた。そうして手ではそろそろと、女の腿を撫でていく。

靖子は、自転車を漕いできたあとの体へ、びっしょり熱い汗をかいた。
杉田たちも、情熱にかられているせいか、窪地には風が通わないので温かいのか、別に寒そうなふうもせず、だんだん互いのシャツやセーターをたくしあげていく。しばらくすると杉田の手によって、女の髪も解かれた。
辺りは山地の常で急速に暗くなっていく。風はますます強くなってくる。だから、高い梢で老杉の枝が鳴り、幹がきしんだ。
靖子はもう自転車の向きを変えても、杉田たちに気づかれる恐れはなかったが、なおしばらく、その場を離れられずにいた。
薄暗がりで絡みあう半裸の男と女。そしてその切なげに喘ぐ二つの肉体を縛りあわせるように、鞭打つように流れる女の長い黒髪。——靖子は、どうしてもそれらのものから、眼を放すことができなかった。
翌朝靖子は岡野牧場のはずれにある乗馬クラブで、くる道の決意をひるがえして、馬に乗ることにした。雅弘の予言を忘れたワケではなかったが、昨日の夕方、牧場内の深い森で、偶然男女の愛しあう光景を目撃した靖子は、夜じゅうほとんど眠ることができなかった。そして眼ざめたとき不意に、自分でもどうすることもできない強さで、彼女は馬に乗りたいと思ったのである。
朝食がすむとすぐ、靖子は馬場へ出かけて行った。
乗馬の用意はなにもしてきてはいなかったが、散歩用にと考えて、ジイン・パンツは持ってきていた。それに長靴や鞭、手袋などは、クラブのものを借りることができた。
「へえ、どういう風の吹きまわしだい。昨日牧場へ着いたばかりのときは確か、馬には乗らないつもりできたといっていたのに」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com